
君の幸せを思って

斉戒 新

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君の幸せを思っ

【Nコード】

N0718Z

【作者名】

斉戒 新

【あらすじ】

ある男が見た最後の幻覚。

抉られた地面に、干からびた仲間達。

もうこんな風景は当たり前だった。

小さな列島で逃げ場なんてなかった。森に入れば体力を奪われ、平地に出れば蜂の巣にされるか地雷の餌食だった。

もう何人やられたのか、わからない。今では僕がただ一人――後ろを振り返る余裕なんてなかった。

照りつける太陽は一向に休めてくれることなく、じりじりと、確実に僕の体力を奪った。だから、僕は必然と止まってしまったんだ。

端が見渡せるほどの平地。

ジャングルの入口の手前――小さな木陰に僕は身を置いた。

そこに君は現れた。

こんな所にいるはずもない、君が。

すっかり色褪せてしまったズボン、黄ばんだシャツ。

でも、お気に入りの髪留めは汚れ一つなくて、照らされた陽に綺麗に反射していた。

君は僕を見るなり笑った。

「何がおかしいんだい？」

君はただ笑った。

「……やだなあ、そんなにおかしくないよ」

今は休憩、ちょっと疲れて休んでいるだけなんだよ。僕が愛想笑いを見せると君は僕に答えるように笑って見せた。

「もうちょつとしたら、行くよ。こんな所にずっといたら敵兵に見つかっちゃうからね」

僕は言い訳がましく君に言った。こんな自分の姿は見せたくなかった、情けなくなった。けれど、君は何も言わず僕の横で微笑んだ。

僕は横になっていたので、君の視線は上からだった。君は膝枕をしてるかの様な近くに、優しく僕を見つめた。

すると突然僕の頬が濡れた。

「……泣いているのかい？」

君は泣いていた。表情は変わらずに涙だけ流れていた。

「どうしたんだい？」

君は何も言わなかった。一滴、二滴、君の涙は僕の頬に落ちると、君の涙は止まった。

君は何も言わずに立ち上がった。

「どこに行くの？」

まって、と僕は君に言った。君は戸惑った顔を見せたけど、ゆっくりとその身を離れていった。

君はにっこりと笑いかけると背を向けて歩きだした——太陽が照り続ける平地、まだ地雷がたくさん残っている場所に。

「だめだ、行っちゃダメだ！そこは危ない、戻ってきて！」

君は一瞬こちらに振り向くとひらひらと手を振った。

大丈夫、安心して、と言われているかの様だった。君は軽快なステップで飄々と向こう側のジャングルにまで歩く、僕はその背中を最後まで見つめることしかできなかった。

「……あつい」

君の姿が見えなくなっただけからは暑さが増したかもしれない。

木陰にいるのに一向に熱は下がる気配なく、頭はずっとぼうつとしていた。歩ける元気があるのなら君と一緒にに行けるのに。

「そうか」

君は動けない僕のために何かを持ってきてくれるのだろう。だから僕を置いて行ってしまったに違いない。

「そうだ」

君が戻ってきていいように何か用意をしておこう。多分、君は僕を喜ばせる何かを持ってくるに違いない、だから僕も何か用意して

おかなくちゃ。僕だって君を喜ばせたい、びっくりさせたいんだ。
「あ」

そう言えば、緊急の食料としてクルミの実を残しておいたんだ。
僕はズボンに入れていたことを思い出して、ポケットに手を入れようとした。

僕の下半身はどこにもなかった。

「あれ？」

おかしいな、なくなることなんてありえないのに。ましてや時分の体だ。

何度まさぐっても僕のズボンのポケットは見つからなかった。それどころか、胴より下は何もなかった。手には生暖かい水っ気だけがまとわりついた。

「ははは」

笑いがこみ上げる。馬鹿だ、僕は馬鹿だった。ありえないんだ。クルミの実なんてどこにもなかった、あるはずがなかったんだ。君が向かったジャングルの向こう側は相変わらず気味悪くひっそりと佇み、君が戻ってくる様子なんて微塵も感じられなかった。

「……ねえ」

君はずっと帰ってこなかった。
相変わらず僕は木陰にいたけれど、何も変わることはなかった。
いや、違う。もう感じなくなったんだ。

「……眠い」

だんだん瞼も開けることも辛くなってきた。
まだかな、
まだかな、
君はまだ帰ってこないのかな。

「……………」

もう分かっていた、君はもう帰ってこないことなんて。僕が見た幻だ。

だから。

きつと、

僕はやることは一つしかなかった。

残された物、残されたモノに自ら精算を下す行為。

僕は内ポケットからあるものを取り出す。

僕の心臓よりも小さいソレ。

ゴリゴリとして、丸い。

「ああ……」

最後にこれだけはしないといけなかった。

もしかしたら君が戻ってくるかもしれないから。

僕は君を悲しませたくない、だから。

見つけられないように、見つからないように。

僕が君を悲しませないように最後の“かくれんぼ”をしよう。

「……ごめんね」

終わることのないゲーム。

でもいつかあったことさえも忘れてしまおう、と信じて。

そして最後は何一つ残らないようにと願う。

「全部……消えてくれると、いいな」

僕は自らそれを引いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0718z/>

君の幸せを思って

2011年12月2日20時57分発行